批判的実在論と“社会”概念［1］
―社会学における間-専門性へと関わらせて―

木田　融男[i]

社会科学における「社会」と社会学における“社会”とがあるが，後者の“社会”を「経済」,「政治」に対置する（中義の）“社会”概念であると定義してきた。その“社会”概念の内実は，批判的実在論におけるバスカーの「四面的社会存在4PSB」から引照しうるのか，しうるとすればそれは何かというのが本稿の第一の課題である。4PSBは彼の「社会活動の転態モデルTMSA」を展開させたものであり，人間の成層的な行為者性を基軸として，自然との関係性を背景に，一方で間-／内-主観（人格）関係，他方で社会関係／構造という視点は，バスカーが言う「具体的普遍」をもつ「社会」の把握であるが，“社会”（そして社会学）の内実としての可能性を秘めている。しかし人間（行為者性）と社会（構造）の「二重性」という基本前提をこの視点はもち，二つの成層を学問対象とする社会学は,「一つ」の専門性としていかに存立するのか，という課題を抱える。私は，バスカーの「薄層」という捉え方，すなわち人間（成層）と社会（成層）との間における創発的複合性としての薄層を“社会”とし，したがって学問的には間-専門性（学際性）inter-disciplinarityという捉え方，すなわち人間科学と社会科学との間における創発的複合性としての薄層を社会学とするという説明をしているが，この提示が第二の課題であろう。

キーワード：“社会”概念，形態転換，四面的社会存在，行為者性，間-／内-主観（人格）的関係，薄層，間-専門性

はじめに
1　“社会”概念をテーマにすること
(1)「社会」諸概念
(2)“社会”概念の問題とCR論の成層性／創発性
(3)“社会”概念への前提
①　マルクス『資本論』の方法に内在する“社会”概念の潜在性
②　「混沌とした表象」における“社会”への前提
2　批判的実在論の四面的社会存在（社会的立方体）
(1) コリアーの薄層化構造体
(2) バスカーの四面的社会存在（社会的立方体）
①　四面的社会存在4PSB
②　4PSBの各平面：(a) 面，(b) 面，(c) 面，(d) 面
③　4PSBの下位次元
④　4PSBと成層
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～以上，［1］前半
(3) 四面的社会存在へのコメント
①　4PSBの構成
②　TMSAがもつ人間と社会の二重性
③　4PSBと「社会」
3　薄層／間-専門性（学際性）と社会学
(1) バスカーの「社会」／社会学
①　バスカーの社会学
②　他の社会諸科学
③　バスカーの「社会」／社会学へのコメント
(2) 薄層と間-専門性
①　成層と薄層
②　バスカーの専門性における薄層
(3) 薄層と社会学／間-専門性

i　立命館大学名誉教授

4　批判的実在論と“社会”概念／社会学
（1）二重性の問題
（2）社会的諸構造（経済－社会－政治）の問題
（3）“社会”における多くの規定と関係
～～～～～～～～～～～～～～～～～～以上［2］後半

文中の略記説明
CR = Critical Realism 批判的実在論
4PSB = Four-Planar Social Being ４面的社会存在
SC = Social Cube 社会的立方体
TMSA = Transformational Model of Social Activity 社会活動の転態モデル
MMC = Marx's Method of Capital マルクスの資本論の方法

はじめに

批判的実在論 Critical Realism（以下 CR 論）を知りだした当初，私が関心をもったのは「社会学」との関連においてであった。CR 論の主導者であったバスカー Bhaskar, R. は，まずはウエーバーを「個人主義的」として人間の側から社会を捉え，次にデュルケームを「集合主義的」として社会の側から個人を捉える見方とし，そしてバーガー＝ルックマンらの提唱を人間と社会の統合を事実上両者の等値と捉える見方とし（アーチャー，M.S. は，ギデンズもこの３番目の立場とし，人間と社会とを区別しない「融合主義」の見方とする。Archer, 1995, p.93f.（佐藤訳，p.131f.）），それぞれ「社会学」の代表的な方法論に対してその錯誤性を批判した。対するに人間（行為者性）agency と社会（構造）structure を，成層（階層）stratification の別個な「二重性 duality」（アーチャーの表現では「分析的二元論 dualism」，ibid. p.132f.（訳 p.190f.））として捉えるという幾分刺激的な提起であった（PN, 1979, p.31f.（式部訳，p.36f.）以下バスカーの文献は，英書名の略記）。

しかしながら，こういった見方からすれば，従来の社会学はそもそも内部で分裂した人間と社会との二重的（二元的）な存在となってしまい，両者の統一とする見方も「融合論」であり両者の区別ができていないとされてしまう。では CR 論ならば，社会学という学問の存在論的対象である「社会」をいかなるものと考え，その対象を認識論的に捉える学問として社会学をどう捉えるのであろうか？　もしも分析的に二元化した一方の側の社会構造のみを対象とする学問とするならばわかりやすいが，おそらく人間の行為から見ていく従来の社会学の大部分を消し去ってしまうだろう。社会構造という成層も人間の行為という成層も，社会学の主要な対象であり，しかも一つの学問として形成される方法論的含意を説明しなくては不十分であろう。私は従来から社会科学の「社会」，そしてその中にあって，それとは異なる社会学の“社会”をテーマとして探究をつづけてきたが[1]，CR 論の以上の提起とも関わらせながら“社会”概念の課題のさらなる考察を行いたい。

1　“社会”概念をテーマにすること

まずは，対象とする「社会」そして「社会学」というものの把捉のための前提を確定しておきたい。科学には自然科学，文化科学があり，後者にはさらに人文科学，社会科学があるとされる。最後の社会科学 social science, Gesellschaftswissenschaft の対象は，当然であるが「社会」（society, Gesellschaft）であり，その中に経済／経営を対象とする専門 disciplin として経済学／経営学，法／政治を対象とする専門として法学／政治学と並んで，「社会」を対象とする専門として社会学 sociology があるとされる（社会学は，時には人文科学の中に入っている場合もある[2]）。本稿の対象である社会学の社会とは，社会科学の対象である「社会」ではなく，その中にある社会学の対象である“社会”である。この“社会”の確定が本稿の課題の出発点なのである。以下に，“社会”概念をテーマにする上で留意する点を列記しておきたい。

第一に，社会科学における「社会」と社会学における“社会”との相違と関連，そして社会科学の中の諸専門（経済学・経営学，政治学・法学など）と

社会学との相違と関連は何であるか。とりわけ，社会科学（諸科学）との相違と関連を考える場合，マルクス理論あるいはそれに近い批判理論において私は見ていきたい。既存の社会学においてはもちろん「社会」とは何であり他の諸科学との関連を述べることは，学問の始めとして種々論じられている。しかし社会科学（諸科学）との関連として述べられことが少ないと思われるので，この点についてはこだわっておきたい。ただし，古くはマルクス理論（あるいはマルクス主義）において，社会学は「ブルジョア社会学としてしか存在しない」とか，「科学として認知しない」とか，さらに社会科学は単一の「マルクス主義社会科学」であり，「社会諸科学をも認知しない」という考え方まで存在したので，今ではそういう考えはあまり見られないものの，とりわけ本課題をマルクス理論の関連で確認しておくことは重要だろうと思われる。

第二に，私が所属していた立命館大学の産業社会学部における独特な課題から派生する問題である。すなわち産業社会学部とは，産業の社会学部／産業社会学の学部ではなくて，産業社会（と呼ばれる現代社会）の学部なのだとされている。したがって学部の教学理念は，「現代社会の諸問題を（社会学を中心に）諸科学で協働して総合的に解明する」と謳われている。中心となる学問対象は，学部を創立した1960年代に産業社会とよばれていた現代社会なであり，上記の言では社会科学の「社会」である。その大きな「社会」に起こる諸問題を，（社会学を中心に）諸科学で協働して（ただし，私が学部に赴任した1980年代頃は，「社会諸科学と協働して」であった，その後，人文科学や自然科学分野の科目が増設され「諸科学と協働して」となった），総合的に解明するのであるが，微妙な点が残存している。例えば，学部の英語名は Faculty of Social Sciences（社会諸科学の学部）であり，「諸科学の協働」の前身である「社会諸科学の協働」を表現しているのだが，すくなくとも「（産業）社会学の学部 Faculty of (Industrial) Sociology」とは決して言って来なかった。ただし，学士号は社会学士であり，隣接する法学部や経済・経営学部との差異化はここにおいてされている。やや「難解」なのは大学院であり，「大学院社会学研究科」であり社会学修士／博士の学位が取得できるが，協働／総合の広いイメージについては，サブタイトルである「応用社会学専攻」の「応用」がそれだと説明されてきた。

私は産業社会学部に赴任して，現代社会論から産業社会学という，学部名や学部教学理念にかかわる教科を担当してきたので，自らの産業社会学部における社会学という位置に当惑しつつも，学生への教育という点では曖昧にはできないので，とりわけ本学における社会学について考えざるを得なかった。したがって留意点として，本学部における“社会”とは，とりわけ上記の第一の留意点（「社会」と“社会”との相違と関連，また社会科学（諸科学）と社会学との相違と関連）を視野にもたざるをえなかったし，より進んで“社会”を対象にした社会学という専門がもつ，他の諸専門との差異性だけではなく，逆に他の諸専門との「間-専門性（学際性）」に適合性をもって開かれているという性格にも留意しなければならないと感じてきた。

次章以降で，社会（“社会”）概念の類型などに関わる検討を少し振り返りつつ，今回はバスカーを中心とした批判的実在論（CR 論）の，四面的社会存在論／社会的立方体論や社会学の考え方，そして成層論／薄層論や間-専門性を検討することによって，“社会”概念に対する研究の一環としての作業としたい。

(1)　「社会」諸概念

社会科学の「社会」と社会学の“社会”との概念における相違と関連を検討するため，「社会」概念の類型を整理しておく（表-１）。ただしここで提示される「社会」概念は，前述したがマルクス理論や批判理論，あるいはそれに関連する社会理論に基づいている。本稿にかかわる限りで各類型に関する若干の説明を付加しておきたい。

表-１　「社会」概念の類型

A　最広義の「社会」概念：社会構成（体）social formation, Gesellschaftsformation
　(a-1)　物質的生活の生産様式（「経済」）と社会的（sozial），政治的，精神的生活過程を含む
　(a-2)　土台（経済的構造）に上部構造（法律的政治的制度，社会的意識諸形態）を含む
　　＊土台－上部構造には（狭義の）「社会」は存在しない
　(a-3)　経済的社会構成（体）
B　広義の「社会」概念：国家に対する「社会」／市民社会 civil society, bürgerliche Gesellschaft
　(b-1)　歴史の物質的土台としての市民社会（歴史のかまど）
　(b-2)　イデオロギー／理念概念としての市民社会（商品の等価交換／労働力との不等価交換）
　　＊ヘーゲルの市民社会（家族-市民社会-国家）
　(b-3)　国家と分立する「社会」（国家-「社会」）
　(b-4)　グラムシの国家との関連での市民社会（「経済」を含む）
　　(b-4-1)　国家と分立し補完する市民社会（国家の支配には市民社会の合意が重要）
　　(b-4-2)　（広義の）国家に含まれる市民社会（国家＝政治社会（狭義の国家）＋市民社会）
C　狭義の「社会」概念：社会的（sozial）生活過程
　(c-1)　上記Ａの（a-1）：経済的生活の生産様式と社会的（sozial），精神的，政治的生活過程における，社会的生活過程（‘sozial’ として ‘gesellshaftlich’ と区別）
　　＊機能主義社会学の社会体系 social system：Ａ次元「経済」，Ｇ次元「政治」，Ｌ次元「文化」に対しＩ次元「社会」＝社会共同体 societal community
D　中義の「社会」概念　「経済」「政治」から相対的に区別される
　(d-1)　再生産過程としての「社会」：生産過程としての「経済」，国家的支配・統合としての「政治」
　　(d-1-1)　再生産・消費過程（家族，地域を含む）としての「社会」（レギュラシオン学派）
　　(d-1-2)　流通・再生産・闘争の領域としての「社会」（アーリ，J.『経済・市民社会・国家』法律文化社 1981）
　(d-2)　ハーバーマスの「政治」システム，「経済」システムに対する，生活世界としての「社会」
E　私案―中義の“社会”概念：「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」としての“社会”

A　最広義の「社会」概念：社会構成（体）social formation, Gesellschaftsformation

これが，社会科学の「社会」概念であろうが，（a-1，2，3）とある３つのタイプは，本稿の関心である社会科学（最広義の「社会」）の内部構成である諸対象（諸専門）を見る上で意味がある。

（a-1）は，「経済（物質的生活の生産様式）」と，「社会／政治／精神（文化）（的生活過程）」の４生活（過程）をマルクスは表象している。ただし，社会構成の「社会」は独語では Gesellschaft であるが，内部構成の「社会（的生活過程）」の独語は sozial が使われている。おそらくこれは『経済学批判要綱（以下，要綱）』における「経済学の方法」（下向／上向法）で，「人口」とよんだ「社会」を分析していく下向前の，「混沌とした表象としての人口」の姿態を四つの生活過程で表わしたものだろう。ただしこの「外来語」のような「社会的 sozial」概念は余り用いられていない。したがって，この sozial で表される「社会」が，“社会”なのかは十分に確定できない。

（a-2）は，よくある「土台（下部構造）－上部構造」で比喩される表現だが，「経済」としての土台（下部構造）と，上部構造は「法・政治（法律的・政治的制度）」／「精神・文化（社会的意識諸形態）」であり，（a-1）の「社会（的生活過程）」は姿を消している。おそらくここには“社会”も存在しないのだろう。

（a-3）は，「社会構成（体）」とは「経済的社会構成体」であるという解釈の延長上にあり，「社会（科学）」とは「物質的生活の生産様式」あるいは「土台（下部構造）」を対象とする「経済（学）」のことであるとして，「社会諸科学」ではなく，「単一の社会科学」すなわち「マルクス主義経済学」であると語られた解釈であろう。ここには他の社会諸科学も，もちろん“社会”および社会学もない。

B　広義の「社会」概念：国家に対する「社会」／市民社会 civil society, bürgerliche Gesellschaft

国家に対置される「社会」は，時に「市民社会」として表現されており，ここで分類される使い方がマルクスによってなされているが，本稿に関わる限りでは基本的には「経済」を内部に抱えた概念といえる。すなわち「歴史のかまど（＝経済）」であるか，「資本主義（資本制，資本家）社会（＝経済）」の「イデオロギー的（理念的／規範的＝精神／文化的）」表現である。対するグラムシの使い方では，「国家（＝法・政治）」に包摂されてしまう概念となっている。ここでは，“社会”概念がまだ基本的に出されていない。『要綱』にある「国家による（市民（ブルジョア））社会の総括」は，マルクス（あるいはエンゲルス）が『資本論』（ただし未完成）を世に出し，今発掘された遺稿を入れたとしても，「経済」の途中（階級の章）までしか書かれていない時点では，「国家」が総括する「社会」の姿態は，「経済」の途中までしか今では推察できない。したがって，この広義の「社会」には，“社会”は概念としてはほんの少ししか実在しないのである。

C　狭義の「社会」概念：社会的（sozial）生活過程

上記Aの（a-1）で表現されている，四つの「生活過程」のうちの一つである。マルクスの場合この四つの生活過程では，それぞれの意味内容および相互の関連，また最広義の社会構成（体）での内部の「構成」の形態など，何も語られていない。ただ，Gesellschaftである「社会」とは異なるsozialという言葉が書かれているわけである。したがって，他の文献などから推量するしかない。そうした推察による私案を，次のDタイプを経て提示する。

D　中義の「社会」概念：「経済」と「政治」から区別された「社会」

「経済」としての生産過程および「政治」としての国家的な支配・統合過程から，相対的に独立した，国民の生活過程を「社会」として区別する考え方であり，NPO（非営利組織）やNGO（非行政組織）の運動を背景にしているが，生産過程に規定された再生産過程，流通／消費過程のイメージが強い。また，ハーバーマスはパーソンズの機能主義的社会システム論の「経済」と「政治」を「システム統合」である「経済／政治システム」の世界とし，対する「（狭義の）社会」／「文化」を合わせて「社会統合」である「生活世界」としている。この社会統合的な生活世界を本稿の社会学的な「社会」と考えられないこともない（ただし，彼は「社会」と考えられる「生活世界」とは別個に「市民社会」を見ており，すると「社会」は「親密圏」を中心とする狭い世界となる）。このDタイプを経て，私案であるEタイプを次に提示したい。

E　私案―中義の“社会”概念：「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」としての”社会”

まずはマルクスの『要綱』に示されている「資本論の方法 Marx's method of Capital（以下，MMC）」では，日常的な目の前にある「社会」は「混沌とした表象としての人口」と称されている。そしてその「表象」を分析／統合（下向／上向）を経ていないゆるやか「概念」として，前述した「経済（物質的生活の生産様式）」と，「社会／政治／精神（的生活過程）」の4範域とした。このうち物質的世界に一番近い範域として「経済」が選択され，のちに「資本制的生産様式」から「資本」，「貨幣」，「商品」へと分析（下向）され，さらに逆に統合（上向）され，最後には「執筆プラン」としてはもう一度「社会」に戻ってくる予定であった。実際は途中（「階級」の章）で執筆は中断されたが，プランでは上向の着地点は「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」としての人口と称されている[3)]。そしてプランはさらに続き，「経済」については世界的広がり（世界市場，国際通貨……）を見るが，上向後の「（市民／ブルジョア）社会」[4)]の確定の上で，その「社会」を総括する「国家」（政治）が登場することとなっていた。いわゆる「国家による社会の総括」であるが，もちろんここの執筆も行われてはいない。

ただマルクスのプランから解ることは，「混沌とした表象」の「社会」から，まずは「経済」が未完ではあるが「資本論の世界」として概念化され，「多くの規定と関係」からなる「社会」に到達するもの

の，ただそこから「政治」については，その「社会」を総括する「国家」へと上向する予定であるから，「経済（資本論の世界）」と「政治（総括する国家）」とを除く「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」の世界こそ，本稿で対象となり得る“社会”と考えられるのではないか。ただし，その内容とは一つの構成要素は「資本論の世界」である「経済」をさらに上向した世界であるが，他の構成要素は「社会的 sozial」／「精神的」生活過程となり，ここはまだ分析／統合（下向／上向）はなされていない世界であり，「規定と関係」についてはまったく「豊か」とは言えないだろう。しかし社会科学で残されている科学的な方法による，それぞれの概念の規定と，概念間の連関を鑑みるならば，MMC を含んだマルクスの『要綱』に表現された，「経済」―“社会”―「政治」の三概念の考え方が整合的ではあろう，と思われる。したがって，私は私案として E タイプをまずは前提としたいのである[5)]。

E タイプの“社会”概念とは，「経済（分析／統合された資本論の世界）」の上向後の世界であるが，同時にそれ自体がもつ「社会的 sozial」／「精神的」諸生活過程（分析／統合はまだ経ていない）らを含む「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」としての世界であり，やがては「政治（国家）」に総括される性格を帯びたものとされよう。

(2) “社会”概念の問題と CR 論の成層性／創発性

E タイプの“社会”概念はしかし，まず問題にされるのは既に半ば分析／統合（下向／上向）がなされた「資本論の世界」を主とする「経済」との関連であろう。すなわち，結局のところ“社会”は「経済」に還元されてしまう「経済決定論」であるとか，“社会”は「経済」を本質（抽象）とする現象（具体）の世界に過ぎないと称される批判である。さらに極端な批判は，「経済（資本論の世界）」の上向の後にある“社会”の実質的内容とは，すべて「経済」すなわち（資本論およびその後の「経済学の方法」による上向の世界）なのだと称されるもので，“社会”（あるいは社会学）は存在しない，あるのはただ「経済」（そして経済学）としての「社会」（そして社会科学）のみであるという，上記 A の（a-3）タイプの考え方であろう。

ここで CR 論の一つの大きな特徴である成層性（階層性）stratification という捉え方が，このような問題への解消の視点を提供するのである。まず CR 論の成層論には二つの捉え方がある（cf. 木田，2017，p.159）。 一つは，「ドメイン（領域）domain としての成層」という思考で，「できごと（事象）event」である「経験的 empirical ドメイン」，「アクチュアル（現実的）actual ドメイン」そして「生成メカニズム generative mechanism（構造）」である「深層実在的 depth real ドメイン」が，三層で一つの成層を成すというものである。もう一つは「階梯 hierarchy としての成層」という思考で，下位の成層（生成メカニズムをもつ）は上位の成層（新たな生成メカニズムをもつ）を形成する条件ではあるが，上位の成層が形成される時には「創発性 emergence」が作用し，下位の層に還元されない独自な新しい特性を上位の層は有するのである。

この成層性とその形成に作用する創発性という思考を，「経済」と“社会”にあてはめると，「経済」に還元される“社会”という，上記の“社会”批判の考え方は，「経済」や“社会”や「政治／精神」，を含む社会科学の「社会」のみを一つの成層とする「ドメインとしての成層」という捉え方になろう。すなわち「経済」が生成メカニズム（構造）としての深層実在的ドメインであり，他の“社会”や「政治／精神」はできごと（事象）としてのドメインであり「経済」に生成され，決定され，還元されるというものである。しかし，「経済」や“社会”などを，それぞれ別個の「階梯としての成層」として捉えるならば，成層としての「経済」を一つの条件として（他に「社会的 sozial」／「精神的」生活過程も条件となる），新しい成層としての“社会”が形成されるが，そこには「経済」に還元されない創発性が，“社会”の成層に独自な特徴を与えるという考え方が成

立することとなる。もちろん次なる「国家（「政治」）による“社会”の総括」も，二つの階梯としての成層の間の関連ということとなり，総括というのは「広義の政治＝国家」が“社会”を「丸ごと」飲み込んでしまうというような一方が他方に還元されてしまうことにはならないのである。

というわけで，CR論の「階梯としての成層性」という捉え方であれば，「経済（資本論の世界）」と“社会”と「政治（国家）」とは，それぞれ他の成層の条件ではあるが，還元されるものではなく，それぞれが他に対して創発性をもつということとなる。しかし，ここで本稿では“社会”概念に関心を絞るならば，この成層がもつ他の層（ここでは「経済」）から与えられる条件とそこで生起する創発性とは何か，マルクスの『要綱』の言では，“社会”は「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」の姿をもつのだが，その新たな規定と関係が与えられる条件と新たな創発性とは一体何かということが課題となるだろう。そしてこの内容こそは，社会科学における社会学の内容を確定していくだろうと思われる。

(3)　“社会”概念への前提

“社会”概念の「経済」と「政治」に対する位置関連が定められたのであるが，ではその内容を検討しなければならない。それはマルクスが『要綱』で語った「多くの規定と関係」というものであろうが，“社会”概念そのものの内容に向かう前に，その内容への前提となるものをあらかじめ考察しておきたい。

①マルクス『資本論』の方法に内在する“社会”概念の潜在性

まずは「経済」成層すなわち資本論の世界とその方法（MMC）については，“社会”成層の形成に対して条件となっており，またそれは“社会”成層の創発性を生成する必然性を潜在させている可能性をもっているのであるから，少しばかり『資本論』あるいはMMCをそういった目から見直す必要があろう。

A　バスカーの「具体的普遍」から：「資本」概念がもたないもの

バスカーは，ヘーゲルの「具体的普遍 concrete universal」の定式を発展させ，概念が時空間化において，普遍的要素，特殊的（特定的）要素，個別的（単独的）要素を複合的にもつ性格づけを行った。そしてこういった具体的普遍をバスカーは著書『弁証法（以下 Dlc）』で，マルクスの『資本論』に適用して，「資本」概念が具体的普遍の適切な記述であるとしながらも，その欠落もあげている。すなわち，『資本論』の資本という具体的概念は資本家的生産様式における当該概念としては，種々の個別的な様相を語り得る普遍性を所持しているとしても，下記を欠如させているとする（Dlc，1993，p.128f.（式部訳，p.211f.））。

一つは，資本家的生産様式以外の経済諸関係で，資本制における資本もまたそれらを含有するのだという視点。そして二つは，「マルクスが携わろうとしなかった一般化，詳細化，拡張化のレベルに限定されるだけの（資本家的生産様式の）内部構造的な諸メカニズムや自存的諸対象であり」，例えば「労働力の再生産，生態圏，ジェンダー，エスニシティ，無意識性はじめ伝統的にマルクス主義的な上部構造や土台に属さないものなど多くの案件」などをあげている（ibid.）。

バスカーは『Dlc』の別の箇所では，マルクスの『資本論』がもっている経済・階級・生産・労働という「単線の視点」を問題視し，現代社会に至って種々様々に勃発している「ジェンダー，民族・人種，エコロジー，宗教」などの課題を扱う「複線の視点」の重要性を述べている（ibid. p.347（訳，p.532），木田，2017，p.161）。同じ論点からのMMC（マルクスの『資本論』の方法）批判のように見えるが，具体的普遍による資本批判は，資本概念そのものがジェンダーなど現代的課題を内含すべきというもので，複線の視点によるMMC批判は，『資本論』が論じる「単一の太い線」である「資本」概念ではそもそも「複線的ではない」ので，現代的課題を内含し得な

いという批判のようであり，若干整合的ではないと思われる。しかしバスカーがそこで述べたい趣旨については，コリアー Collier, A. やセイヤー Sayer, A. らも認めており，私も同感したい。

しかし同感した上で，ここであげられているマルクスの『資本論』が内含していない，ジェンダーなどの現代的課題を扱うことの可能性については，当時におけるマルクスの経済的生産様式の分析／統合（下向／上向）における射程，すなわち資本の生産過程における「商品」から「資本」，流通過程そして，総過程における「階級」まで上向した道程の半ばで中断した範囲内では実現できるとは思えず，さらに「経済」の世界を上向していく途上か，あるいは本稿で課題とする“社会”という新しい成層に入った上で「創発」する新しい「規定と関係」において，当該の「現代的課題」を内含し得るのではないかと考えるのである。まさに，バスカーがここでマルクスには欠如していたと言う「現代的課題」を，過去のマルクスの執筆途中の『資本論』に要請するのではなく，現代の時点で，MMC のより上向した方法論的場面（“社会”における成層の場面）での研究課題であると思われ，本稿で検討したい新しい「規定と関係」の内容探究の課題なのではないだろうか。

付加しておくと，伝統的にマルクス主義的な概念としてあげられている「土台と上部構造」という「社会」の捉え方（ここにはマルクス自身が述べた「社会的 sozial」生活過程は既に内含されていない）であるが，バスカー的言でいうと，具体的普遍ではなく「抽象的普遍」の概念ではないかと考えられる。なぜなら，マルクスは当初のプランでは，「多くの規定と関係からなる，豊かな全体性」としての「社会」を下向／上向による方法で，まずは資本論の世界を描き出し，次には“社会”の世界に到達する予定であったろう。しかし上述したように，マルクスの執筆は「経済」の半ばで終了してしまっている。すなわち“社会”の内容（多くの規定と関係）の下向／上向（分析／綜合）は残念ながら行われてはいない。したがって，土台と上部構造（「経済」と「政治」／「文化」）は多面的な個々の多くの具体性を内含しない「抽象的思考による普遍的な（抽象的普遍）」概念であり，その限りでのみ有効な捉え方であったろうと推察できる。しかしここで提起された課題も新しい“社会”概念として，より豊かな内容（規定と関係）を提示し，具体的普遍としての“社会”概念を探究する上での現代的課題であろうと思われるのである。

B　MMCの内容が必要とする“社会”概念の方法

次に『資本論』あるいは MMC で積み重ねられていく「経済的」な「規定と関係」のなかに，“社会”概念の内容，とりわけそこで培われる社会学的方法を必要とするものがあるのではないかという場合である。例えば『資本論の方法』の著者であった見田石介は，「論理的に借りのある概念」という考え方を提示している（見田，1963，p.171）。例えば，MMC の冒頭に出てくる「商品」概念は，CR 論で言う「超事実 trans fact（あるいは半-事実）」的な概念と言えようか。なぜならば事実のレヴェルで商品が発生するのは，資本制的生産様式においては資本による生産であるから，その資本概念が規定されていない冒頭の商品概念の著述は，後の資本による生産を前提にして，すなわち「前借り」して規定されている概念なのである。そういった概念は MMC では多い。商品を価値と使用価値に分離して，抽象化の末に価値はやがて抽象的労働の社会的時間によって労働価値に至るし，対する使用価値も同じく欲望に至る。しかしこの冒頭の著述でも，労働も社会的時間も欲望も，すべてが「前借り」の概念であり，上向した途上で規定されて初めて超事実性を脱することができる。さらにずっと後に規定されるとしても，それが資本論の世界の範囲で「前借りの返済」になるとは限らない。例えば労働の規定は，絶対的剰余価値の労働過程で規定されるとしても，その抽象的労働という概念や社会的時間という概念，また欲望という概念は，「経済」の範域を超えて，心理学，生理学なども含みつつ，「経済」を含むより下位の成層を基礎的条件として成立し，しかも新たな創発性

をもつ社会学の規定を必要とするであろう。こういった諸概念はそこまでの上向を待って，概念形成の完成すなわち超事実性の転換を迎えるのである。

あるいは，価値形態における貨幣への転換と発生に必要なものは，国家あるいはその他の媒体による「信用」であり，関連する人々による「間主観的な」信用の構成が不可欠であるが，MMC の価値形態の箇所では，国家もまだ出現しないし，信用という目に見えない意味の世界の出現もはるか上向のさらにもっと向こうにある概念と方法であろう。まさしく社会学などにおける行為論あるいは意味論，そしてその意味構成論／間主観性論などの正確な方法的把捉により，MMC の論理的な全体の完成が成立するのだと思われる。まさに『資本論』の MMC が「論理的に借りのある」“社会”概念を方法論的に必要としていると言えよう。

さらに『資本論』の中途終了における「階級」の問題であるが，それまでの「経済」的規定のみで描かれる「階級」像であり，本来は「経済」から“社会”への「架け橋」にもなるはずだったと思われる「階級」概念は，まったく社会学的展開を見ぬまま，今日でも「格差社会」論などで取りあげられているとしても，その「実在的」把捉を「経済」的基礎条件をもちつつも，社会学的に創発的な「規定と関係」を新たに身につけた「階級」概念を正確に措定する探究が必要とされている（CR 論的方法を階級論に適用した拙稿を参照。木田，2015B）。

②「混沌とした表象」における“社会”への前提

「混沌とした表象」であった“社会”の四つの（「経済的」「社会的 sozial」「政治的」「精神的」）生活過程の中から絞り込まれた「経済的」なものの下向／上向は未完成ではあるが MMC で行われた。また「政治的」なものではその中心となる国家は，「多くの規定と関係からなる豊かな全体性」としての“社会”が，概念として成立することを前提としてその総括という形態で，やがては下向／上向がなされよう。ならば，混沌とした表象としての“社会”に残るのは「社会的 sozial」および「精神的」生活過程ということとなる。これらの下向／上向もされなければならないのはもちろんではあるが，「経済」の MMC のようには既知のものとして存在しない。今あるそれら二つの生活過程の内容に当たるものは，混沌とした表象とも，下向／上向を経た「豊かな全体性がもつ規定と関係」とも判然としない，膨大な既存の社会学における“社会”の諸概念群と言えるであろう。マルクスが書き残した「社会的 sozial」や「精神的」な生活過程という「表象」が何であったかも含めて，本稿の課題はそれらの内容を，とりわけ下向／上向を経た「経済的」のさらなる上向からと，まだ下向／上向を経てない「社会的 sozial」や「精神的」な生活過程から，推定するということとなろう。

2　批判的実在論論の四面的社会存在（社会的立方体）と“社会”概念

前章では，「経済」「政治」に対する“社会”概念を位置づけ，さらには MMC がもつ下向／上向の方法を経た，“社会”がもつ内容である「多くの規定と関係」を探究するための前提を検討した。本章ではその“社会”概念がもつ内容を検討するのが課題であるが，CR 論の中心的存在であったバスカー Bhaskar, R. が提示する「四面的社会存在 four-planar social being（以下，4PSB）／社会的立方体 social cube（以下，SC）」を見ていきたい。

(1) コリアーの「社会」：薄層化構造体

社会科学の「社会」や社会学の“社会”を CR 論ではどのように捉えるのだろうか。成層 stratification[6] の理論からは，まずは物理（物理学が対応），化学（化学，以下同），生物（生物学），人間（人間科学あるいは人文科学），そして「社会」（社会科学）の各成層を考える。この「社会」という成層の内部については，「ドメインとしての成層」論の場合だと，経済が土台であり，CR 論的には深層の実在的なドメインとしての生成メカニズム generative mechanism

と言え，そして政治や文化は上部構造となり，CR論的にはアクチュアル（現実的）なドメインと経験的なドメインとしての出来事（事象）eventとなろう（ただしマルクスの土台－上部構造論には私論の“社会”はない。また上部構造の構造は，CR論の生成メカニズム概念である構造とは概念内容が異なる）。また「階梯としての成層」論の場合であると考えたのはコリアーCollier, A.であり，彼は経済，政治，イデオロギーという三つを，（大きな）成層である「社会」の内部に，それぞれ別個の（小さな）諸成層が存在すると捉え，各成層が構造であり生成メカニズムを有しているとした（コリアーもここでは私論の“社会”は考えていない）。ただし，概念としては彼独自の命名で，「社会」である（大きな）成層を「構造体structuratum」と呼び，その内部に上記の三つの（小さな）諸成層＝諸構造structuresを持つとした。ちなみに人間としての（大きな）成層も構造体であるとし，二つの（小さな）諸成層＝諸構造（心と身体）を持つとするのである（Collier, pp.99-100）。

コリアーは，さらに構造体という大きな成層の内部にある小さな諸成層（諸構造）を，薄層（積層）laminationとして捉え[7]，こういった諸薄層（諸構造）をもつ大きな構造体を，薄層化構造体laminated structuratum（あるいは薄層化システムlaminated system）と呼んだ（ibid. p.103）。そして「社会」については，全体が一つとなって層をなす諸存在物として語るが，その「社会」が持つ特性とは，「組成されている『社会』の諸水準にある諸メカニズムの合成としての作動なくしては存在することができなかった」とし，これを一種の創発性と捉え「水平的創発性horizontal emergency」と称したのである（ibid. p.100）。「階梯としての成層」の場合，下位の成層が上位の成層を生成するが，そこで上位の成層がもつ創発性を「垂直的vertical創発性」と言うこととなる。そして「ドメインとしての成層」と「階梯としての成層」（垂直的創発性）を区別してきたが，後者からはさらに「薄層としての成層」（水平的創発性）が区別されることとなる[8]。

こういったコリアーのアイデアに対しては，次章の薄層論のようにバスカーは別途の展開をさせていくのだが，構造体論については以下のコメントを出して若干の疑問も呈している（Dlc, 1993, p.5（式部訳，p.95））。

バスカーは，まずは構造体という語義の曖昧さを指摘している。すなわち「構造体は，ある構造の一つの存在論的例示化なのか，それとも具体的個体ないし具体的単独者をあらわすのか，そしてさらに一般に，多数のばらばらな矛盾的ですらある諸構造の縮合物condensateなのか，それらの効果の縮合物なのか」と問いかけ，バスカー自身は，「それらの作用様式（生成メカニズムないし因果力）の縮合物であろう」としている。また「構造体が創発した諸水準に因果効果を及ぼす場合であっても，依然として構造体はそれらの構造体が創発した諸水準によって他律的に条件づけられ，左右され，影響される」ともしている。時としてバスカーも自著で構造体を使用しているのだが，薄層についてはかなりコリアーとは異なる捉え方になり，３章で詳しく見たい。

(2) バスカーの「社会」：四面的社会存在

では「社会」をバスカーはどのように捉えるのだろうか。もちろん「社会」を，「ドメインとしての成層」として考え，「経済」＝生成メカニズム（深層実在的ドメイン），「政治，イデオロギー」＝出来事（現実的，経験的ドメイン）という捉え方はしないのだが，しかしコリアーのように，「経済，政治，イデオロギー」といった諸構造をもつ構造体とも考えない。諸成層／諸次元／諸水準などからなる四面的社会存在（以下4PSB）／社会的立方体（以下SC）として考えるのである。ただし，4PSBは「社会存在social being」であって，決して「社会」ではないことは断っておきたいが，社会存在へのバスカーの見方が，（社会科学の）「社会」における，（社会学の）“社会”の内容（規定と関係）を考察するのに資すると思われるのでまずは4PSB／SCの確定を行

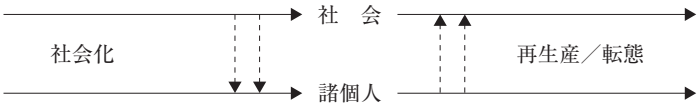


図-1　社会活動の転態モデル TMSA

（PN, 1979, p.36（訳，p.41））

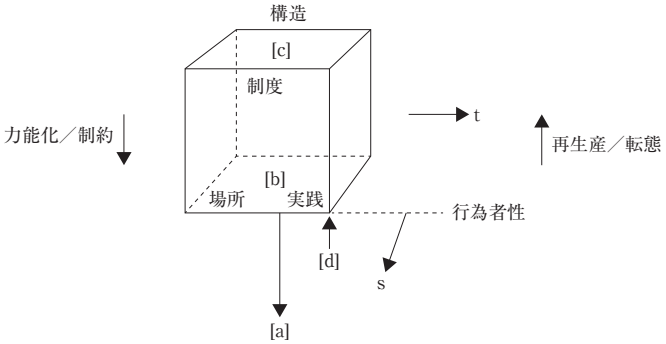


図-2　四面的社会存在 4PSB（社会的立方体 SC）

（Dlc, 1993, p.160（訳，p.257））

っておきたい。

①四面的社会存在 4PSB

A　社会活動の転態モデル TMSA との関連

バスカーは人間（行為者性 agency）と社会（構造）を別個の二つの成層として捉えながら，両成層の関係性による「形態転換（以下，転態）transformation」を説明する「社会活動の転態モデル transformational model of social activity（以下，TMSA）」は，彼が人間と「社会」を語る基礎的モデルである。彼は，TMSA の一般化・弁証法化・実質化が四面的社会存在 4PSB であり，この観点から社会生活を理解するのだとしているが，図-1と図-2との比較によって，TMSA と 4PSB との具体的な関連性を見ておこう。まずは前者の図では，「個人（あるいは人間の行為者性 agency）」と「社会（あるいは社会構造）」との相互作用であり，その相互作用として一方では社会化（あるいは力能化／制約），もう一方では再生産／転態がある。後者の図との対応では，下平面（b）が個人（人間の行為者性）に対応し，上平面（c）が社会（社会構造）に対応し，さらに（b）面と（c）面との相互作用として立方体横側にそれぞれ，力能化／制約および再生産／転態が対応して示されている。（b）面および（c）面の内容は後述するように，TMSA とは異なってはいくが，この基本内容は踏襲され 4PSB でさらに展開させられたのである（ibid. p.160f.（訳，p.256f.））。

B　4PSB の前提と特徴

さて，4PSB がはじめてバスカーにより提示されたのは『科学的実在論と人間解放（以下 SR & HE）』であり，それがより具体的になり，また応用されるのが『弁証法（以下 Dlc）』であるので，基本としてはこの両文献から 4PSB を見ていこう。まずは，その前提と主な特徴は次のように語られている。

社会存在を一つの三次元的流れとして社会的立方体の形で表示し，分析による個別的な諸契機が識別され，また律動的 rhythmical[9] に中心に向かう過程および位相として理解でき，さらには諸要素が複合的で対立的な決定や媒介に服するのだとされる。上記したように TMSA の発展形であるが，それは同時にギデンズ Giddens, A. らの「構造化論」や「中心合成（融合）論」から区別するためのものでもある[10]。そして全体性としては，「部分的全体性」[11] ではあ

るが上記の具体的普遍のあらゆる契機を体現しているとする。ただし，人格の深層（階層構造），時間（t）と空間（s），社会過程の律動性，多重性の視点，などは正確にはこの図では表現されないと断っている（ibid.）。

②4PSBの各平面：(a）面，(b）面，(c）面，(d）面

この立方体では，「社会存在」を四つの平面planarで表すが，それぞれを見ていこう。

A　各平面の確定

バスカーは，初期の著作から，死後の遺稿が掲載された著作まで，幾度も4PSBを応用的に使用しているが，その四面の名称については変化してきている。変化は表−２で示しているが，それら変化に意味があるものは後述するとして，4PSBの各名称については彼の最後の遺稿を，一応の「確定版」として，必要な小さな変更を加えたものが次の（a）から（d）である。

（a）自然との物質的諸交流 material transactions with nature
（b）社会的諸相互作用 social interactions
（c）社会的諸構造 social structures
（d）身体化された人格の成層 the stratification of the embodied personality

B　各平面の説明〈SR & HE, p.128, k.3068, Dlc, RMR,〉

4PSB（SC）における各平面およびそれらの関連性など必要なものを説明しておこう。ただし，以下では「行為者性」から見た4PSBの説明を採用して

表−２　バスカー四面的社会存在（社会立方体）の編年変化

［(a_1）物質的諸交流 material transactions（の平面)］
［(a_2）自然との物質的諸交流 material transactions with nature］
［(a_3）物質的世界との質量的諸交換 material transactions with the physical world］
［(a_4）自然との物質的諸交流 material transactions with nature］
［(a_5）自然との物質的諸交流 material transactions with nature］

［(b_1）社会的諸相互作用 social interactions］
［(b_2）間−／内−主観（間−／内−人格）的諸関係 inter-/intra-subjective（personal） relations］
［(b_3）間−／内−人格的諸関係 inter-/intra-personal relations］
［(b_4）諸人間間の社会的諸相互作用 social interactions between humans］
［(b_5）行為諸主体（エージェンツ）間の社会的諸相互作用 social interactions between agents］

［(c_1）社会的諸関係 social relations］
［(c_2）社会的諸関係 social relations］
［(c_3）（固有の sui generis）社会的諸関係 social relations ］
［(c_4）社会的諸構造そのもの social structures proper］
［(c_5）社会的構造そのもの social structure proper］

［(d_1）人格の成層 stratification of personality］
［(d_2）行為主体（エージェント）の主観性 subjectivity of the agent］
［(d_3）人格の成層 stratification of personality］
［(d_4）身体化された人格の成層 the stratification of the embodied personality］
［(d_5）精神的，感情的，肉体的存在を含む，身体化された人格の成層 including mental, emotional, and physical being］

（n_1）［SR & HR, 1986（2009）〈p.129〉］
（n_2）［Dlc, 1993（2008）c2s9〈p.160（p.257)〉］
（n_3）［Dlc, 1993（2008）c3s7〈p.258（p.401)〉］
（n_4）［ICC, 2010〈p.8〉］
（n_5）［IWB, 2018〈k.358〉］　※ k. は kindle 版

いるが，この見方はバスカーの著書『メタ実在性の省察（以下，RMR)』から取っている（RMR，2012)。

・行為，行為者性，実践

社会学の基礎概念である「行動（ふるまい）behaviour」から，「意味 meaning をもつ行動」すなわち「行為 action」（人間は「行為者 actor」）に対して，CR 論では「志向的因果性 intentional causality」をもった人間，すなわち自然や社会を再生産し転態する能力を有して，それを意識的，意図的に使用し，転態しようとする人間の行為を「行為者性 agency」とする。そして行為者性を有する行為者を「行為主体 agent」とする。また，一般的な行為が，具体的に定められたある時間のある空間で，自然や人間と相互諸行為しあうことを「実践 practice」とするが，ここでも普通の一般的行為である「社会的慣習的実践 practice」と，転態的力をともなう志向的行為者性である「人間的実践 praxis」とを区別する[12)]。

・行為者性と関わる四平面

まずは平面（d）およびそれと並行する対面では，図-２-(4）に見るように，立方体の中では実践としてある時間のある空間が与えられているが，時間（t）の変化では単調ではない「律動性」をもちながらも，過去から未来（弁証法的な ϕ 転換）へと歴史（社会史，生活史／誌）を行為者性（人間的実践）において刻んでいく。

そして立方体の中側では，平面（a）およびそれと並行する対面は，図-２-(2）のように立方体の周りの自然環境（生態圏から宇宙まで）と行為者性である平面（d）との物質的交流の窓口になっており，「自然との物質的諸交流」すなわち「物質的世界とのエネルギー交換」を為す平面とされる。ちなみに（d）面の行為者性もその志向性とは主観的ではあるものの，それ自体は「身体化された人格」という自然／物質の一環としても存在するがゆえに，当初は「行為主体 agent の主観性」と名づけていたが，「身体化された人格の成層」と呼ぶようになる。

さらに，TSMA から展開された一方の平面（b）は，（d）面としての行為者性が他の人間と社会的な相互作用をする場ではあるが，「間-主観（相互-人格）的／内-主観（内部-人格）的諸関係」として，主観的から人格的な人間あるいは行為主体 agent ／協働行為主体 agents 同士による，間（相互）inter-作用および内的（内部）intra-作用という複雑な諸関係で記されつつも，後には（b）面は「社会的諸相互作用」と称されるようになる（図-２-(3)）。

また TMSA のもう一方である平面（c）は，（d）面の人間としての行為者性には，時間的には「先行」した存在なのであるが，同時に（c）面は行為者性と独立して存在はしえないのである。そのような諸行為者性による（b）面における社会的諸相互作用において，人間的諸関係から社会的諸関係を生み出し，そして「社会的諸構造」を形成するのである。この（c）面の社会的諸構造がバスカーにおける典型的な「社会」といえようが，本概念のみではここで探究したい“社会”との関連が不分明であり，より詳しく後のところで比較検討を加えたい（図-２-(3)）。

C　社会的認識論への批判の視点

社会的認識論への批判ということでは，社会（構造）と人間（行為者性）とを融合させてしまうギデンズへの批判から，4PSB が考察されていると先述した。また『Dlc』の著では（b）面や（c）面の捉え方が，「非批判的解釈学」や「ディスクール論」への批判の視点につながるとバスカーは記しており，これらの理論は「共在感覚 co-presence から通話に至るコミュニケーション的相互行為の表層面」にのみ関心を向け，「社会的主観性と間-人格的主観性 social and inter-personal subjectivity はただ一つの様式でしか捉えられていない」とし，前者は後者に解消されていると批判している。表-２を見ても，そういった問題意識で作成された（b）面のネイミングが何度も変わっているのは，バスカーが社会的認識への批判的展開を模索する表れであろうか（Dlc，1993，p.163（式部訳，pp.260-1)）。バスカーらの CR 論は，経験主義的実証主義への批判だけではなく，ポスト・モダニズムや社会構築主義，またポスト構造主義などへの「内在的批判」を進めてき

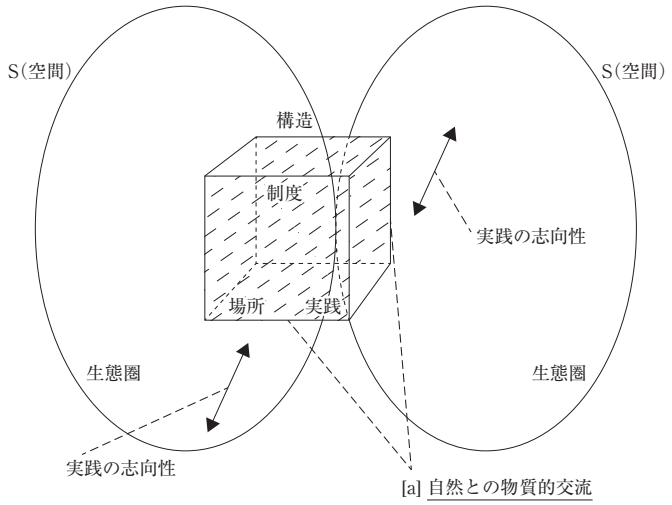


図-２-(2)　[a] 面

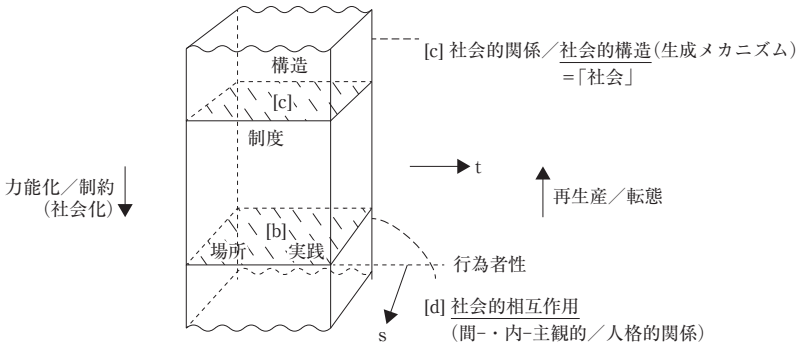


図-２-(3)　[b] [c] 面

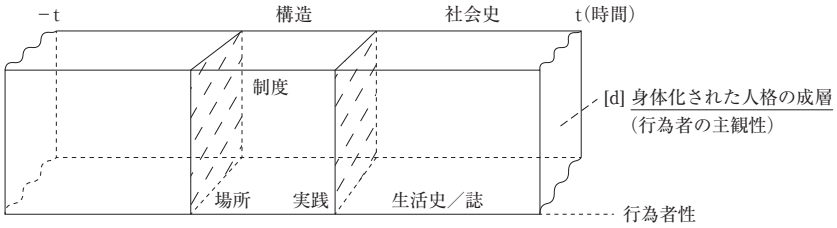


図-２-(4)　[d] 面

たのだが，ここに記されている「社会的認識論」への批判のさらなる検討を含めて，私自身の今後の課題としたい。

③ 4PSB の下位次元

（c）面の社会諸構造には下位次元 sub-dimension があり，（c-1）「力関係」，（c-2）「言説関係」，（c-3）「規範関係」の三つで，さらに（b）面の社会的諸相互作用は，（c）面に対応して，（b-1）「力関係」，（b-2）「コミュニケーション関係」，（b-3）「道徳関係」がある。さらに，（c-1，c-2）の「力」は，「力$_1$」

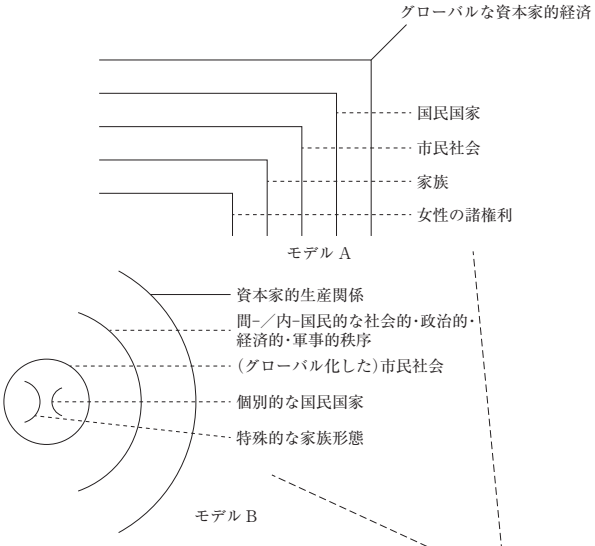
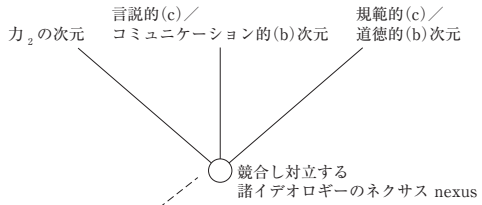


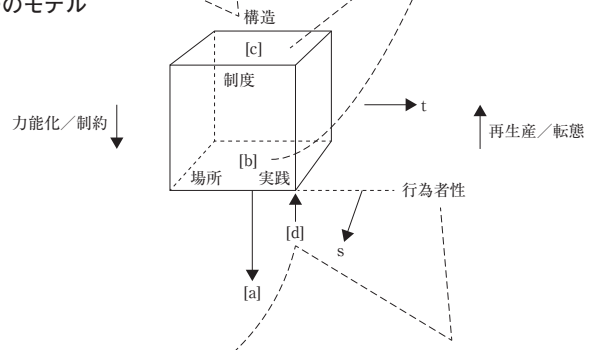
図-３-(1)　上部構造の２つのモデル

（ibid. p.162（訳，p.259））

図-３-(2)　SC の３つの下位次元の交差領域としてのイデオロギー

（ibid. p.161（訳，p.258））





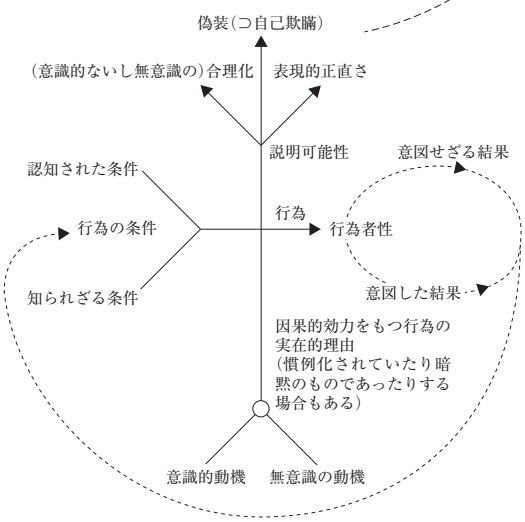


図-３-(3)　行為の成層化

（ibid. p.165（訳，p.262））

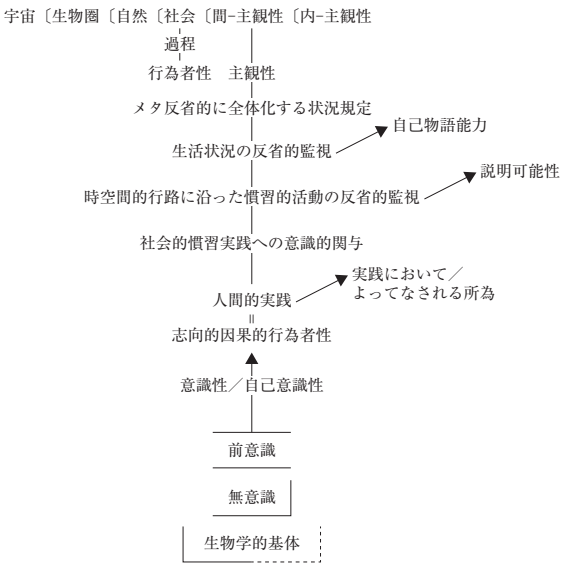


図-３-(4)　行為者性の成層化

（ibid. p.167（訳，p.264））

としての「行為者性の転態能力」であり，（a）面にも表れる「物質的な力」は作用効果としての制約$_1$となる。もひとつは「力$_2$」としての「超事実的効力を有する能力（一般化された主人-奴隷関係）」であり，（b，c，d）面のみに表れる「社会的／主観的な力―その内（b，d）は内-主観性」は制約$_2$となり，解釈学や，「物質的」性格や，覇権化／分散化などの闘争の場で作用する。そして，（b-1，2，3／ c-1，2，3）の交差点がイデオロギーとされ，力$_2$，言説／コミュニケーション，規範／道徳の三次元が交わる位置にある（図-３-(2)）。ここでの下位次元という奇妙な構成はともかく，力$_2$や主人-奴隷関係については，CR 論に理解があるマルクス理論の階級論などと論争があり[13] 本稿でも後段で検討しておきたい（ibid. pp.161-2（訳，pp.257-8））。

④ 4PSB と成層

前述したようにコリアーは，「（最広義の）社会」にあたる対象を構造体 structuratum とし，その内部の「経済，政治」にあたるものを薄層 lamination と表現して，前者はいわば「（広義の）階梯としての成層」であり，後者はその成層内部にある諸構造で「（狭義の）階梯＝薄層としての諸成層」と言えよう。しかしバスカーは，四面的社会存在を構造体とも成層とも称さず，ただ各次元 dimension や各水準 level あるいは各平面 planar で成り立つ立方体 cube と呼んでいる。そして各平面を見れば，それらと関係する行為者性 agency は，（d）面を形成するが，「身体化」しているという意味では自然的世界の一環として捉えられるけれども，人格として「人間的世界」における諸成層としての捉え方をし，『Dlc』ではバスカーは，「成層化した行為（行為者性）」として詳細な説明（図-３-(3)(4)）を行っている（ibid. p.162f.（訳，p.259f.））。また（a）面はその行為者性と自然との相互作用を扱い，さらに（b）面で行為者性と他の人間との相互作用を扱うが，そこには成層の成立はない。そして（c）面において，人間的諸関係から社会的諸関係，そして社会的諸構造あるいは社会的諸制度という形で，構造の成立さらには成層の成立を呈し，「二つの上部構造モデル（A，B）」として成層の図表化も提示している（図-３-(1)）。ちなみにモデル A は，下部構造－上部構造の形態で，下部層が上部層の限界条件を決定する場合とし，モデル B は，下部（外部）構造－上部（内部）構造の形態で，外部としての下部層が，内部としての上部層の可能条件を設定するとするが，いずれにしてもそれぞれの成層は創発性をもつことに変わりはない。ただし，各成層（経済，政治，社会……）は「階梯としての成層」であるように考えられている。この捉え方は，各成層を「水平的創発性」をもつ「（狭義の）階梯＝薄層としての成層」と捉えるコリアーとは異なっている。また私は，コリアーとは違う意味で，“社会”については成層であっても別個のものと捉えたいのであるが，後述を参照していただきたい。

さらに，バスカーの上記のモデル A，B が，図において具体的に成層化されて記載されているものを考察しておこう（バスカーはほとんど説明は行っていない）。成層の一番下位に「経済」が来ている。モデル A では「下部構造（土台とは称さない）」で「グローバルな資本家（訳では資本主義）的経済」とされ，モデル B では球体の「外部構造」で「資本家的生産関係（訳では生産様式）」とされている。どちらのモデルでも，（c）面の社会諸構造において最下位の成層として「経済」が捉えられている。ちなみにコリアーは経済，政治，イデオロギーの成層（構造）には順位（上位-下位）はつけていなかった（垂直的創発性ではなく水平的創発性）。また「経済」の次にはモデル A では成層は上部に上がっていき，「政治」である「国民国家」とされ，下位（下部）の「経済」成層が上位（上部）の「政治」成層の「限界条件を定める（外枠をはめる）」とあり，さらに上部へと「市民社会，家族，女性の諸権利」という主として「経済」や「政治」とは異なる「社会」にあたる成層が記載される。モデル B では成層は球体の内部に進むのだが，「間-／内-国民的な社会的，政治的，経済的，軍事的秩序」とあり，下位（外部）

の成層が上位（内部）の成層の「可能条件を設定する（与える）」とあり，成層はさらに内部へと「（グローバル化した）市民社会，個別的な国民国家，特殊的な家族形態（ただし最後の二つの成層は，上位–下位（内部–外部）関係ではなく，水平的関係の図になっている）」という，主として「経済」「政治」とは異なる「社会」にあたる成層が記載されている。モデルAでは，市民社会が「（広義の）社会」に，家族，女性の権利が「（狭義の）社会」にあたるだろうし，モデルBでは間–／内–の各秩序がグローバル化した「（最広義の）社会」に，グローバル化した市民社会がグローバル化した「（広義の）社会」に，個別的国民国家が国民的な「政治＝国家」に，特殊的な家族形態が国民的でミクロな「（狭義の）社会」にあたるだろうか。またバスカーがMMCの批判を「資本」という具体的普遍の概念の「狭さ」とし，土台–上部構造から除外されたとされる現代的課題（労働力の再生産，生態圏，ジェンダー，エスニシティ，無意識性など）は，この記載あるいは4PSBには確かに含まれてはいる。ただし，こういった諸成層あるいはその集合体（コリアーがいう構造体）の相互の関連，また4PSBにおける他の平面との関連などについては説明はされていない。とりわけ，この（b）面が「（最広義，広義，狭義の）社会」として対応は見られるのではあるが，本稿が主題とする“社会”として，あるいは社会学の“社会”としてどう対応させてよいのかは，さらに検討が必要であり後段で考察したい。

注

1）　拙稿の1979から2005までを参照していただきたい。とりわけ“社会”概念の考察については，1979B，1980，1997，1999，2005。

2）　私が学生／院性の時に学んだのは，文学部哲学科社会学専攻で人文系だったが，教員としては産業社会学部で社会科学系に属している。

3）　Marx，1857–58（高木監訳）の「経済学の方法」。なおCR論のリトロダクション／リトロディクションに関わる拙稿は，マルクスの資本論の方法MMCとの比較について書かれているが，とりわけ下向／上向との比較検討を行っている（木田，2016A，2016B，2017）。

4）　この社会は，『要綱』ではbürgeriche Gesellschaftであり，普通に訳すと「市民社会」であるが，大月版（高木監訳，1959）では市民に「ブルジョア」とルビがあり，岩波文庫版（武田他訳，1956）では「ブルジョア社会」と市民が抜けている。この社会は「混沌とした表象」であり，下向／上向が完成した「豊かな全体性としての社会」の性格はもたない。ただ，「経済（資本論の世界）」とも，「政治（国家）」とも別個の，しかも「イデオロギーとしての市民社会」とも別個に実在する“社会”であると考える。

5）　ただし私案の“社会”概念では，日本の企業“社会”的資本主義の位置付けを，「経済」に包摂された日本の“社会”という形態で，欧米の「経済」から「相対的に自律」した“社会”（「市民社会」的資本主義）と対比する概念であり，「規定と関係」については，現代日本の「具体的なもの」の分析から提示されている。具体的普遍の概念については拙稿の研究では不完全である。

6）　CR論の翻訳では多くの場合，stratificationについては「階層」と訳されておりstratumの訳と同じ訳語が使われているので，私は「成層」という訳で統一している。パーソンズ機能主義でもstratificationが出され，「成層」と訳される場合があるが，もちろん意味内容は異なっている。

7）　『弁証法Dlc』（式部訳）では，コリアーの使った用語をバスカーが引用する場合のlaminationが「積層」と訳されている。ここで出てくる場合と，バスカーが後に成層と成層との複合的重なり（あるいは専門と専門との交差的重なり）を，laminationと呼んでいる場合とは異なり，後者には「連言（論理積）」の重なりが「薄い層」の様態を示すので，「薄層」という訳語がいいのではと判断した。

8）　ただし次章で考察するが，バスカーの薄層lamination（諸成層の複合的重なり）とコリアーの薄層lamination（積層と訳された，大きな成層内部の小さな諸成層）とは内容が異なる。もっともこれら二種類の薄層が存在すること自体を認め

うるとは思うが，今後の課題としたい。

9） 律動 rhythmic とは，CR 論における空間，時間，因果性の三者一体性を象徴しており，構造ないし事物の因果効力の作用で，空間が時制により変化する過程をいう（Dlc，1993，p.403（式部訳，p.611［用語解説］））。

10） バスカーは，自分の TMSA は「ギデンズの構造化理論と似ている」としながらも次の２点の批判をギデンズに対して行っている。(1) 主意主義的傾向が強く，構造と行為者性とのズレを可能にする否定的一般化を試みることが困難である。(2) 行為の作因としての力$_1$と，支配関係としての力$_2$の弁別に失敗している（ibid. p.154（訳，p.249［注］））。

11） 全体性 totality とは，バスカーの弁証法的 CR 論にとって，四つの尺度（1M：非同一性，2E：否定性，3L：全体性，4D：行為者性）に関わる重要な概念である。内在的（必然的）internal 連関からなるシステムで，多種多様な内部 intra-作用性（cf. 本稿の２章（3））を示し，総体的 holistic 因果性を通じて作用する（ibid. p.405（訳，p.620［用語解説］））。全体性には，絶対的―，下位的―，部分的―があるが，社会的世界の把捉（例，4PSB）は部分的全体性だとする。なぜなら諸要素間に外在的（偶然的）external 連関や無連関なものも含まれるからとされる（ibid. 126f.（訳，p.207f.））。

12） agency，agent(s) については，訳さないでエージェンシー，エージェント（ツ）のままもあるが，式部訳では前者は行為者性，後者は（諸）行為者などと訳されている。ギデンズ著書の和訳では前者が主体的行為とか行為者性，後者は（諸）行為者である。いまだ定訳はないが，本稿では前者を「行為者性」，後者を「行為（諸）主体」としたが，訳し方については今後の検討課題としたい。

13） バスカーの力$_2$そして主人-奴隷関係については，マルクス主義から「あまりに抽象的で一般的すぎ……階級という中心となる説明論上の重要性を軽く見過ぎだ」という批判が紹介されている（FCR，2010B，p.135）。バスカーは，「階級抑圧はその他の全て（の抑圧）を色づけし，最も重要だ」と応えた上で，4PSB の（c）面は社会諸構造を扱っているのだが，力$_1$と区別される力$_2$は「搾取，支配，抑圧の構造」であることの確認，および「階級抑圧とその理解に付加して，抑圧の他の様式が存在する」，あるいは「マルクス主義者も抑圧の多元的な形態をとらえるべき」と主張をしている（ibid. p.136f.）。「具体的普遍」という本稿１章で紹介した，概念把捉におけるバスカーの MMC への「付加的注文」といえようが，「複合的な関係的決定（ibid. p.135）」を階級抑圧とどう関連させて説明するか，そのための“社会”説明（例，4PSB）をどう発展させるかはさらなる課題であろう。（例えば私の場合，現代における「格差関係」と「階級関係」との理論的／経験的な関連性を試みている。木田，2015B）

引用／参考文献

Archer, M.S. Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach, Cambridge University Press, 1995（佐藤春吉訳『実在論的社会理論―形態生成論的アプローチ―』青木書店，2007）

Bhaskar, R. The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences, Harvester Press, 1979, (2nd: Harvester-Wheatsheaf, 1989, 3rd : Routledge, 1998)（式部信訳『自然主義の可能性―現代社会科学批判―』晃洋書房，2006）/ 略称 PN

Bhaskar, R. Scientific Realism and Human Emancipation, Verso, 1986, (2nd: Routledge, 2008A) / 略称 SR & HR

Bhaskar, R. Dialectic: The Pulse of Freedom, Verso, 1993, (2nd: Routledge, 2008 B)（式部信訳『弁証法―自由の鼓動』作品社，2016）/ 略称 Dlc

Bhaskar, R. Reflections on MetaReality: Transcendence, Emancipation and Every Life, Sage Publication, 2002, (2nd: Routledge, 2012) / 略称 RMR

Bhaskar, R. & Danermark, B. Meta theory interdisciplinary and disability research: a critical realist perspective. Scandinavian Journal of Disability Research, 2006, 8(4)

Bhaskar, R. et.al. (eds.) Interdisciplinarity and Climate Change: Transforming Knowledge and Practice for our Global Future, Routledge, 2010A / 略称 ICC

(in this book)
Parker, J. Towards a dialectic of knowledge and care in the global system

Bhaskar, R. with Hartwig, M. The Formation of Critical Realism: A Personal Perspective, Routledge, 2010B / 略称 **FCR**

Bhaskar, R. with edited with a preface by Hartwig, M. Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism, Routledge, 2016 / 略称 **ECS**

Bhaskar, R., Danermark, B. & Price, L. (eds) Interdisciplinarity and Wellbeing: A Critical Realist General Theory of Interdisciplinarity, Routledge, 2018: kindle / 略称 **IWB**

Brown, G. The ontological turn in education, Journal of Critical Realism, 2009, 8(1)

Collier, A. Scientific Realism and Socialist Thought, Harvest Wheatsheaf Lynne Riener Pub. 1989

Marx, K. Grundrisse der Kritik der politischen Oekonomie, Dietz verlag, 1857-58（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店，第１分冊，1959）

Marx, K. Das Kapital — Kritik der politischen Oekonomie, Dietz verlag, V.1: 1867, V.2, V.3 (Engels, F.): 1885, 1894（岡崎次郎他訳『資本論』大月書店，１巻，２・３巻（エンゲルス，F.）：1968）

Marx, K. Zur Kritik der politischen Oekonomie, Erstes Hett, Volksausgabe von Marx-Lenin-Institüt, 1934（武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫，1956）

Price, L. Critical realist versus mainstream interdisciplinarity, Journal of Critical Realism, 2014, 13(1)

Price, L. & Lotz-Sisitka, H. (eds) Critical Realism, Environmental Learning and Social-Ecological Change, Routledge, 2016

木田融男「“社会”と権力・支配―“社会”概念の基礎的検討を通して―」『社会科学論集』10号，大阪府立大学社会科学研究会，1979A

同　「“社会”概念をめぐって（上）（下）」『新しい社会学のために』19号／20号，現代社会研究会，1979B／1980

同　「現代日本における“社会”の性格」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第21巻，第２号，1985

同　「企業“社会”体制と生活価値」，木田融男・佐々木嬉代三編著『変貌する社会と文化』法律文化社，1990

同　「“社会”概念と日本社会」『特集：産業社会学部国際交流シンポジウム―産業社会の変容と市民社会の再生―』，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第32巻，第４号，1997

同　「“社会”概念と共同性」，中久郎編『社会学論集―持続と変容』ナカニシヤ出版，1999

同　「“社会”概念と市民社会」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第41巻，第１号，2005

同　「批判的実在論とリトロダクション―マルクス理論との関連で―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2015A

同　「格差社会と階級理論―批判的実在論を通して―」櫻井純理他編著『労働社会の変容と格差・排除―平等と包摂をめざして―』ミネルヴァ書房，2015B

同　「批判的実在論とリトロダクション―社会科学方法論の比較から―」，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第53巻，第４号，2016A

同　「批判的実在論とリトロダクション―覚え書き―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2016B

同　「批判的実在論とリトロダクション／リトロディクション―複合決定の問題と関わらせて―」，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第54巻，第１号，2017

同　「間―専門性（学際性）と薄層」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2018

見田石介『資本論の方法』弘文堂新社，1963

Critical Realism and “Society” Concept [1] :
On the Inter-Disciplinarity in Sociology

KIDA Akio [i]

Abstract : Unlike ‘society’ as it is envisaged in social science, “society” in sociology has been defined as a (middle ranged) concept in contraposition to ‘economy’ and ‘politics’. The first purpose of this report is to examine whether the reality of this “society” concept can be quoted from Bhaskar’s ‘four-planar social being (4PSB)’ of critical realism, and if it is possible, what specifically can be quoted. He developed 4PSB based on his ‘the transformational model of social activity (TMSA)’. With stratified agency of human beings used as a key against the background of relations with nature, standpoint of 4PSB on inter-/inner-subjective (personal) relations and on social relations/structures is to understand “society” with ‘concrete universal’ which was suggested by Bhaskar. This may be the reality of “society” (sociology). However, the standpoint illustrates duality of human beings (agency) and society (structure) as a basic assumption, and sociology, which studies the two stratifications, has a problem concerning how to be established as one specialized academic field. I understand Bhaskar’s concept of a ‘lamination’ as the society which has emergent compositeness between the stratification of human being and that of society. Therefore, I explain sociology as a lamination with emergent compositeness between human science and social science, based on the academic concept inter-disciplinarity. This suggestion will be the second theme to be discussed in this report.

Keywords : “society”concept, transformation, four-planar social being, agency, inter-/intra-subjective (personal) relations, lamination, inter-disciplinarity

i Professor Emeritus of Ritsumeikan University